

青
あおおに
白
鬼
調査
10

怪物ホテルの幻を打ち破れ！

ノプロプス 黒田研二 / 原作

波摘 / 著

鈴羅木かりん / イラスト

優助

北部小学校の五年生。

レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サツカークラブに入っているが、オカルト調査クラブのメンバーとしても活動している。パラサイトバグが体内にいないにもかかわらず、青鬼化できる特殊な体質を持つている。

レイカ

北部小学校の五年生。オカルト調査クラブ部長。学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことになると周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

スズナ

北部小学校の四年生。オカルト調査クラブのメンバー。夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルト調査クラブに入ることを決意。レイカになついている。





魔尾町現悩(デンノウ)——
オカルトを中心に研究している
民俗学者。青鬼に強い関心を抱い
ており、夏休み明けから北部小学
校・オカルト調査クラブの顧問と
なった。



たまちゃん

ひとだまのような青い炎を放ち、
宙に浮かぶ。レイカたちに協力的
だが、その不思議な力を使うた
めには、大きな代償を支払う必
要がある。



知香

二十年前、家族でまほろば遊園
地を訪れた際に事件に巻きこま
れ、青鬼の《王種》となった少年。
二十年間、「地下の王」として遊
園地の地下で孤独に過ごしてい
た。今はレイカたちと協力関係
にある。

ひろし

北部小学校の五年生。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。



タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、バレルと面倒なので秘密にしている。



クロさん

レイカたちがまほろば遊園地を調査している最中に会った男性。青鬼に詳しいが、危険人物のようだ。



ハルナ先生

レイカたちやひろしが通う北部小学校の教師。クロさんの裏切りによって心に深い傷を負い、一時期学校を休んでいた。



10

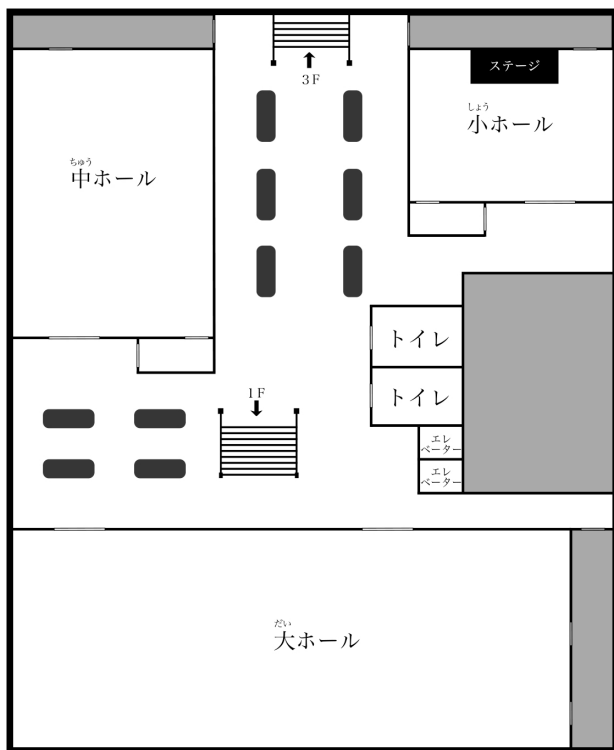
青 あおおに 鬼 ク 調査 ラス

碧奥グランドホテルの見取り図	006
1 知香君の報告	011
2 ひろし君との対決	024
3 碧奥グランドホテル	040
4 遠夢未成	057
5 『幻覚の王』	072
6 レストランフロア	086
7 大浴場	096
8 客室フロア	112
9 ひろし君の秘策	126
10 魔を待ち、現実に悩む	144
11 屋上階の大決戦	158
12 大切な親友	180
碧奥グランドホテルの見取り図 その2	186

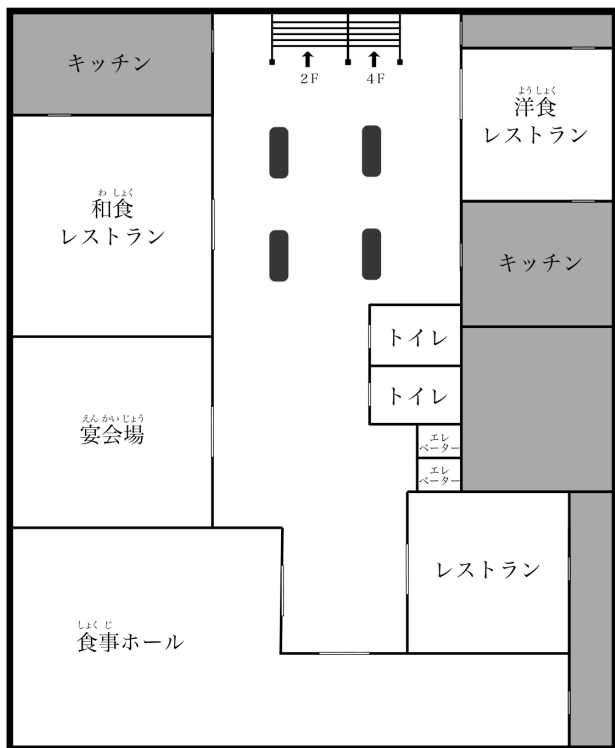
碧奥グランドホテルの見取り図

● …ソファ席

2F / ホールフロア

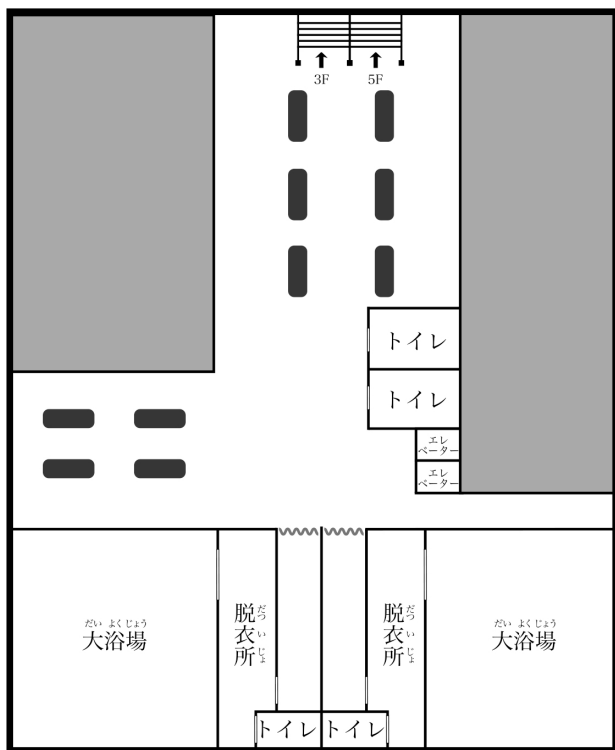


3F / レストランフロア

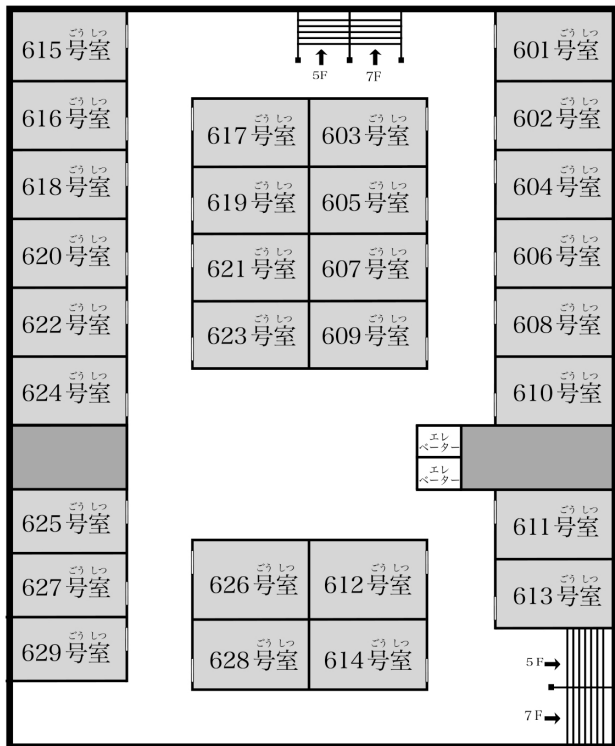


● …ソファ席^{せき}

4F / 大浴場^{だいよくじょう}フロア



6F / 客室フロア



あらすじ

自分たちが通う北部小学校に怪物が現れたことや、その後に関心を持った様々な事件をきっかけに、オカルト調査クラブで怪物——「青鬼」について調べ、「倒す」ことを決意したレイカ。幼なじみの優助、一つ下の学年のスズナ、顧問でオカルト民俗学者のゲンノウさん、ひとだまのような姿のたまちゃん、《王種》の知香……「青鬼」の調査を続けるうちに増えていった仲間たちとともに、レイカは今「青鬼好きの《王種》」の居場所を突き止めようとしていた。

ブルースター

十年前、隕石として宇宙から飛来し、碧奥町を中心とするあちこちに今も散らばっている。見た目は星型の入れ物のようになっていることから、それが危険なものだと知らずに所持している人間もいるようだ。中にはパラサイトバグが入っている。

パラサイトバグ

ブルースターの中に入っているイナゴのような見た目の虫。死んだように見えても、生きていることがある。パラサイトバグを体内に取りこんだ人間や動物は、青鬼になってしまう。青鬼化した人間は凶暴な性格になることが多いが、まれに自分の意思を保ちながら、上手く青鬼の力を使うことができる人間もいる。

《王種》

複数の青鬼に命令を下して操ることができると、青鬼を束ねる《王》となる力を持った特別な青鬼。現在確認されている《王種》は、とてつもない巨体を持ち「地下の王」と呼ばれていた知香、四体の青鬼を自在に操り『兵隊の王』と呼ばれているソル、ソルを裏で助けていた『青鬼好き』と呼ばれる謎の存在。知香は「優助も《王種》だ」と考えているようだが、真偽は不明。

1 知香君の報告

くがつにじゅうくにち
九月二十九日、夕方。

オカルト調査クラブの部室には、久しぶりにメンバーが全員勢ぞろいしていた。

しばらく姿を見ていなかった知香君とたまちゃんもいる。……というよりも、知香君がわたしや優助、スズナちゃん、ゲンノウさん呼び集めたのだった。

「『兵隊の王』に協力していた、青鬼好きの《王種》らしき情報がようやく手に入った」

知香君は窓際に立ち、椅子に座っているわたしたちと目を合わせてからそう言った。

優助は苦笑いをして、頭の後ろで両手を組む。

「調査クラブはほんとに休みがないよな」

碧奥墓地の一件からまだ二日しかたっていない。優助の言うことももつともだ。それでも、わ

たしとゲンノウさんは新しい《王種》の情報に興味津々だった。

「今度の《王種》にはどんな特徴があるの？ 居場所はどこ？」

「どうやって情報を手に入れたのかね？ ぜひ私にも《王種》の情報の探し方を教えてくれ」



探求心に火がついたわたしたちは思いついた質問をいっぺんに投げかける。
知香君はあきれた様子で答えた。
「二人が興味を持つてくれるのは嬉しいけれど、情報は順番に整理して伝える。優助やスズナが

置いてけぼりにならないように」

「あ……」

知香君の言葉でわたしは冷静さを取り戻す。視線を移動させると、目が合ったスズナちゃんも困ったような表情でにこつと笑った。

わたしはこほんとせき払いをして、改めて知香君に向き直る。

「それじゃ、知香君。どんな情報を入力したのか教えてくれる？」

知香君は小さく息を吸ってから話し出す。

「まず前提として、今回手に入れた『王種』の手がかりが確実に『青鬼好き』のものかはわからない。ボクは碧奥モールの戦いで、『王種』に独特の気配と匂いがあることに気づいた。匂いはメサイアのものほど強くないけどね。そしてモール内には『兵隊の王』のものとは別の匂いがかすかにあつて、今回はその匂いをたどることにしたんだ」

『兵隊の王』であるソルはクロさんをおびき出すために、青鬼好きの『王種』に協力してもらつていた。

直接会いにいったこともあつたから、その時に相手のわずかな匂いを持ち帰ってきた可能性はじゅうぶんにある。

「それで匂いはどこに続いていったの？」

わたしの質問に応じて、知香君が話を再開する。

「碧奥モールから碧奥市の中心部に向かって続いていた。匂いは消えかかっている、神経をかなり集中させないと感じ取れない状態だったから苦労したよ」

調査していた時のことを思い出したのか、知香君は苦い表情を浮かべる。

「だけどたまちちゃんと手分けすることで、なんとか匂いの元を突き止められた。たまちちゃんがいなかったら、たぶん途中であきらめていたと思う。ほめてあげてくれ」

たまちちゃんが元気に左右に揺れる。

「頑張った！」と身振りで表現しているようだ。

わたしは手招きしてたまちちゃんを呼び寄せ、その頭をなでるようにしながら、話の続きに耳をかたむける。

たまちちゃんは嬉しそうに目を閉じていた。

「ここからが本題だ。『青鬼好き』がひそんでいる場所は——碧奥グランドホテル。たくさんの



人々が入り出す、碧奥市でも人気のホテルらしい」

「ほう？」

ゲンノウさんの眉がぴくりと動く。何か心当たりでもあるのかもしれない。

碧奥グランドホテルの存在はわたしも知っていた。

近くを通りかかったことも何度かある。泊まったことはないけれど、かなり大きな建物だったはずだ。

「私、一度だけ碧奥グランドホテルのレストランで食事をしたことがあります」

スズナちゃんが手をあげてそう言った。

「とてもきれいなホテルでレストランの他にも、様々な施設が入っていたはずですよ」

「ホテルからは《王種》の強い気配を感じた。今もホテルの中にいるのは間違いない」

その点には自信があるようで、知香くんははつきりとそう言いきった。

「《王種》はホテルに泊まっているの？ それとも従業員にまぎれているのかしら？」

通常時のソルや現在の知香君は人間の姿をしている。青鬼好きの《王種》もふだんは人間として行動している可能性が高い。

ホテルのような人目の多い場所ならなおさらだ。

知香君は少し残念そうに目を伏せて続ける。

「こちらの気配に気づかれるのは避けたかったから、ホテルの中までは調査できていないんだ。だけど、できる限り情報がほしかったボクたちは丸一日、ホテルを外から監視した」

そして知香君は確信を持つている様子で告げる。

「結果的に、『王種』の気配は一度もホテルから移動しなかった。従業員ならどこかのタイミン
グで家に帰るはずだ。つまり、『王種』は宿泊している客だと予想できる。それも碧奥モールの
一件よりも前から、かなり長い間泊まっている客だ」

優助が感心したように腕を組む。

「そこまで調べるなんて、知香はやっぱすごいな！あとはホテルの中を調査すれば、『王種』
が誰か突き止められそうじゃなか」

「ありがとう。この情報が調査クラブのためになることを祈るよ」

知香君は小さく微笑んだ。

いつもはあまり感情が表に出るほうではないけれど、今回は嬉しそうだ。

「……」

優助たちが盛り上がる一方で、ゲンノウさんは何かを考えるように黙りこんでいた。

「どうしたんですか、ゲンノウさん？」

「いや、奇妙な偶然もあるものだと思うてね」

ゲンノウさんはゆつくりとこちらに身体を向ける。

「実は近々、その碧奥グランドホテルでオカルトの専門家たちが集まるパーティーが開かれるのだよ。ここ一年の間に発売されたオカルト本の中から優秀作品を決めて表彰するものでね。毎年、場所を変えて開催されている。今年はたまたま碧奥市で行われることになっているのだが

「その会場のホテルに青鬼の気配がある、ということですか」

「……本当に偶然なんでしょうか？」

スズナちゃんが真剣な声色でたずねてくる。

疑うのも無理はない。《王種》が青鬼好きということは、言いかえればオカルト好きということだ。

人間の姿の時はオカルト研究者として活動しているのかもしれない。

ゲンノウさんは少し沈黙した後、それ以上考えることをやめたように息をはき出す。

「ふむ。たとえ偶然でなかったとしても、私たちのやることは変わらないな。むしろ私の関係者

として、皆をホテルに連れていくことができる。好都合だ」

小学生のわたしたちが表向きの理由もなく、ホテルの中を歩き回って調査すると目立ってしま

う。

パーティーに出席するという形を取れば、だいぶ自然に動けそうだ。

「でも、こんな大人数で押しかけて大丈夫ですか？ 会場にも定員とかがあるんじゃないや……」

わたしがそう心配すると、ゲンノウさんはやりと楽しそうに笑みを浮かべてみせた。

「レイカ君。私が誰か忘れていないかね？」

「え？」

「私はこう見えても、研究者の間では有名なオカルト民俗学者、魔尾町現悩だ。パーティーでは毎回、選ばれた優秀作品へのコメントをお願いされていてね。その関係でパーティーの主催者は、私が誰を何人誘っても断れないのだよ！」

「なるほど……！」

ずつと一緒にいるせいで忘れがちだが、わたしも以前はゲンノウさんのオカルト本を熱心に読んでいた。

ゲンノウさんはオカルト界限ではかなり有名で、わたしがパーティーの主催者だとしても、絶

対に来てほしいと思うだろう。納得の理由だった。

知香君が近寄ってきて、わたしたちと目を合わせる。

「今後の方針は固まったかな？ ボクとたまちゃんは引き続き《王種》の動きを監視する。もしもみんなが来る前に《王種》が移動しそうだったら、すぐに連絡を入れるよ」

「パーティーはいつなんですか？」

優助がゲンノウさんに問う。

ゲンノウさんはスマホを取り出して予定表を確認した。

「開催日は十月二日だ。あと数日、《王種》がホテルにいてくれることを願うとしよう」

そうして今後の予定が確定し、知香君とたまちゃんは《王種》の監視をするため、すぐにホテルへと戻っていった。

わたしや優助、スズナちゃんはパーティーに参加する許可を、前もって親からもらっておいたほうがいいだろう。

それに《王種》と対面する可能性があるのであれば、戦う準備も必要だ。

開催日は数日後だが、あまり時間はない。

わたしたちは当日までにやっておくべきことを整理して、その日の調査クラブの活動を終えた。

「スズナちゃん、ちよつといいかしら？」

部屋を出たところで、わたしはスズナちゃんに声をかけた。

「どうしたんですか、レイカちゃん？」

「次の《王種》の調査をする前に、ひろし君との関係を改善できないかと考えてるんだけど、もし良かったら、明日一緒にひろし君のところに行かない？ スズナちゃん、手品の件でリベンジに燃えていたでしょ？」

碧奥墓地に行く前、スズナちゃんは北部小の図書室でひろし君たちに手品を披露したらしい。そしてその場でひろし君にタネをばらされてしまい、その上で逆に『通し』と呼ばれる方法を使った手品もどきを見せられたのだという。

ひろし君にまったく悪気がないのはわかっている。

だけど、真剣に手品をしたスズナちゃんにとつては気分のいい出来事ではなかったようだ。嫌だと思つたことをそのままにしておくのは良くない。

「自分はこういう理由で嫌だと思つた」ということを相手に告げ、その上で仲直りするのが一番

だ。

スズナちゃんがリベンジをして、それが結果として仲直りにつながるのなら、わたしは協力を惜しまない。

スズナちゃんはわたしの誘いに目を輝かせた。

「行きます！ ひろし君へのリベンジ、絶対に成功させます！」

「どうやらスズナちゃんもそこまで悪い感情を持つているわけではなく、どちらかというところ、今度は驚かせてみせるという気持ちが強そうだ。」

ひとまずケンカにはならなそうので安心する。

「ひろし君は『通し』を使ったことが私にバレていないと思つてはいます。だから碧奥墓地でレイカちゃんが提案してくれたように、『通し』を組みこんだリベンジ方法で、すべてお見通しだということを暗に伝えたいと思つています！」

スズナちゃんは気合が入つた様子でそう言つた。

「どうせなら普通の手品じゃできないくらい、派手にするのでもいいんじゃないかしら？ ひろし君に大量のランプを引いてもらつて、そのすべての数字を足した数を当てるとか」

「それ、すつごくいいです！ さすがレイカちゃんです！」

目をキラキラと輝かせたスズナちゃんがぐつと両手を握りこむ。やる気がすごい。

「その作戦でいくのなら、『通し』のサインを決めておかないとね。簡単なハンドサインにしよう」

「ハンド……ということとは、手を使うんでしようか？」

「ええ。わたしはひろし君の手札を見てスズナちゃんに教える。その時にカードの数字の分、右手から指を立てていくわ。ハートの3だったら三本。スペードの9だったら、右手が五本で左手が四本の計九本。今回、マークは関係ないから伝えない。問題は10以上の数字の場合だけど、その時は左手の親指を立てる。あとは右手の指を立てた本数で一の位を示せば完璧よ」

「な、なんだか難しくてくらくらしてきました……」

スズナちゃんは顔をしかめて、わたしが説明した内容を必死に理解しようとしている。わたしはくすつと笑って続けた。

「言葉で説明すると難しく聞こえるだけよ。実際に指を使って練習してみよう。やってみるとすごく簡単だから」

わたしとスズナちゃんはハンドサインを使う練習を始める。気をつける必要があるのは10以上のカードの表し方のみで、あとは単純に指の本数を数えればいい。

実際に数回練習すると、スズナちゃんも理解できたようだ。

「うん、ハンドサインはもう完璧ね。あとは明日、ひろし君を呼び出すだけだわ」

わたしがそう言うと、スズナちゃんは首をかしげた。

「レイカちゃんもひろし君との関係を改善したいんですよ？ そっちのことは考えなくていいんですか？」

「ええ、大丈夫よ」

わたしは自信満々に笑みを浮かべる。

「——そっちはすでに作戦を考えてあるから」

2 ひろし君との対決

スズナちゃんハンドサインの練習をした翌日の昼休み。

わたしとスズナちゃんは校舎の端でひろし君と向かい合っていた。

「わざわざここまでして、呼び出した理由はなんなのですか？」

ひろし君の声色にはかすかなあきれが混じっている。

彼を教室から連れ出すのには苦労した。

最初は普通に「用があるから来てほしい」と頼んだのだが、ひろし君は「僕には関係ありません」の一点張りでまったく動こうとしなかったのだ。

いつもならそこまで拒否されることはない。青鬼について聞かれると思つて警戒しているのだろう。そう思つたわたしは次の手を打つことにした。

作戦、というほどのものでもない。

頼みに応じてくれないのなら「青鬼という怪物が存在する！」とこの場で騒ぎ立てると、ひろし君に告げたのだ。

ストレートな脅しである。

わたしは少し前から、青鬼の存在とその危険性を世間に広めたほうがいいと考えている。しかしひろし君は真逆で、他人を巻きこまないように、青鬼の情報は伏せておいたほうがいいと考えているようだ。

その脅しはわたしには何のマイナスもなく、ひろし君だけが困るものだった。

ひろし君は小さく眉をひそめた後、観念したように立ち上がり、校舎の端までついてきてくれた。

わたしの好感度はかなり下がっていると思うけれど、これもひろし君と話をするために必要なことだ。

実際、教室から連れ出せたのだし、これで良かったのだと思う。

「今日、ひろし君を呼び出したのはスズナちゃんのリベンジを果たすためよ」

わたしは腰に両手を当て、目の前のひろし君に対して好戦的な笑顔を見せた。

「リベンジ、ですか？」

青鬼関連の話題ではなかったため、ひろし君は予想と違ったという表情をしている。

もちろん、最終的には青鬼の話につなげるつもりだが、今はまだ早い。



「この前の日曜日、スズナちゃんの手品のタ
ネをみんなにバラしてしまっただんでしょ？
それでスズナちゃんがリベンジに燃えてる
の」

「なるほど。それでスズナさんが一緒だった
のですね」

「はい！ だから今日は新しい方法で、ひろ
し君を驚かせようと思って——」

やる気満々のスズナちゃんがそう言ったの
と同時。

ひろし君は悩む素振りもなく、スズナちゃ
んに対して深々と頭を下げた。

「え？」

スズナちゃんは突然のことにあわてふため
く。